

平城宮第69・70次発掘調査概要

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が特別史跡「平城宮跡」において行っている発掘調査のうち、昭和45年8月以降に調査を開始した第69次・70次調査についてその概要を報告する。

各次別の調査地区、発掘面積、期間は次表のとおりである。

調査次数	発掘地区	面積 a	発掘期間
69次	6 A B P - A・B・D	34.15	昭和45年8月3日 ～11月21日
70次南	6 A A E - N・M	31.2	昭和45年11月1日 ～昭和46年1月25日
70次北	6 A A D - G	17.0	昭和46年1月6日 ～

I 第69次発掘調査

第1次内裏推定地北域の 3415 m^2 について発掘調査を実施した。第1次内裏外郭については、大極殿推定地を取り込んだかたちで、東西約 178 m 、南北約 317 m の長方形に築地回廊を巡らせていましたことが第2～7次・27次・41次の調査によって明らかとなった。この築地回廊の内部を南北に3等分した北の一郭は、北から南へのびる丘陵の先端を利用した台地を形成しており、第36次調査の第2次内裏後宮に並ぶ地域である。台地は宮造當前の丘陵を利用した造成地であり、当初、地山を切り込んで台地の南限を設定していたが、のちに、更に南に拡張していることが判明した。ただし、拡張後の南限は後世に削り取られて判らない。

遺構は建物14棟、堀5条、溝などを主として、次の4期の建てかえが認められた。

A 期

A期に属する遺構は、この地域の中心建物SB6605と、この時期の台地南限を示す地山の段落SX6600、および木製階段SX6601などである。

SB6605は宮中軸線上にある東西棟で、 7×2 間分を検出した。現存の堀

方は浅く（10～20cm），しかも後の建物を殆んど同柱位置に建てかえているので，確認できた柱堀方は10ヶ所にすぎず，当初規模はこれより大きくなるかも知れない。

SX6600はSB6605の南9mのところで東西に一直線にのびている。高さは1.5～1.7mであるが，SB6605の堀方の深さなどから推定すると，当初の高さは2.5～3m位いあつたと思われる。壁面は約70度の勾配をもち，堀を全面に平積み・破れ目地で積み上げて化粧を施していた。しかし，後の台地拡張のときに殆んど取り除き，現存では最高7段を認めるにすぎない。なお，壁面基底部は築地回廊内の南北全長を3等分する位置にある。

SX6601は木製階段の支柱と考えられるもので，正しく中軸線に位置して上記壁面にとりついていた。これはのちに取り払って，バラスを全面に敷き，このとき，との階段の南方に小抗列SX6604を打ち込んでいる。

当初の台地上面は次のB期の拡張に際して相当深く（1m以上）削り取られ，拡張部分の埋土に使用されたらしく，そのため，台地上の建物遺構は1棟を残して殆んど消失したものと思われる。

B 期

台地を南に拡張すると同時に，北面回廊を南に移して，敷地全体を南にずらしている。また敷地内を10尺方眼地割として建物平面および配置を計画して大造営を行ない，4期のうちで最も大規模に整備された時期である。

遺構は正殿SB6610と附属屋7棟（SB6660・6655・6663・6666・6669・6640・6650—各々東第1殿・2殿……7殿とよぶ），および発掘区北端のSC6670などである。

建物配置は正殿の東に18mの間を置いて，第1～5殿の東西棟が南北に整列し，正殿と第1殿のあいだに第6殿，正殿と第3殿のあいだに第7殿を配置している。

正殿は9×9間，総柱（ただし南面から第8柱列の中央4ヶ所は東柱）の大規模な平面をもっている。しかし，梁間については北方が未発掘地にかかっているため，どこで前後2棟に分割できるのか，現状では判断し難い。

東第1殿は身舎7×2間、南北両面廂つきの建物である。第3殿は第1殿に北孫廂と間仕切りをとりつけた平面をもつ。この2棟の中間に5×3間、馬道つきの第2殿が軒を接して建つ。第4・5殿はいずれも7×2間、間仕切り(10尺の開口部あり)のある建物である。第6殿(3×2間)、第7殿(桁行2間以上、梁間3間)はそれぞれ正殿と第1殿・第3殿の中間にあり、このあいだ(60尺)を5等分する桁行柱間(12尺)をとっている。

SC6670は柱間4m弱の礎石柱列で、第5殿の北10.5m(35尺)のところに東西6間分検出した。礎石はなく、大きな根石を残すのみであるが、西方ほど残存状態が悪く、西端柱位置では掘方の底が僅かに認められる程度である。この礎石柱列は昭和29年発掘の第2次内裏外郭北面築地回廊の南柱列の西延長上にあり、又、柱間も同寸であることなどから、一条通り道路敷下に築地回廊遺構の存在を想定することができる。

なお、この時期の後半に小改造を実施している。すなわち、第2殿を廃して、第1殿に北孫廂を増築し、第3殿とのあいだに南北塀SA6657を建てる。この塀は3間(6.3m)の目隠塀で、方眼地割にはのらない。

C 期

B期より建物規模を縮小し、配置を全面的に変更する。また、北面築地回廊を撤去し、敷地を塀によって小区画に分割するなど、遺構の性格は一変する。

遺構は正殿SB6620、脇殿SB6622、後殿SB6621の3棟の建物と、塀(SA6623, 6624・6625・6626)、溝などである。

正殿は身舎7×3間(10尺間)に4面廂(14.5尺間)つきの東西棟である。身舎前面中央の4つの堀方には、30~60cmの深さのところで自然石が上面を揃えて環状(内径50cm程)に敷かれていた。建物の東面と西面には玉石敷き、埠積み側壁の雨落溝があり、南面には素堀りの溝がある。

脇殿は桁行5間以上(9尺間)、梁行2間(10尺間)の身舎に東西両面廂(14尺間)つきの南北棟で、北妻柱通りを正殿南面にあわせている。建物南部は削平されて、桁行全長は不明である。建物の東西北面には玉石の雨落溝を巡らせ、正殿の東雨落溝につながる。

後殿は桁行4間以上、梁行2間(9尺間)の礎石柱身舎に、掘立柱の南北両面廂(12.5尺間)つきの東西棟である。身舎の礎石掘方は、南面および北面柱通りで布掘りとし、妻柱では独立の掘方である。しかし、出土状態はきわめて浅く、根石は残されていない。なお、昭和33年の調査で、この建物の北廂に対応する柱列を2間分検出していることから、後殿を宮中軸線に対して東西対称に配置しているものと思われる。

塀SA6623は脇殿の妻柱から北に7間のびて、正殿と後殿を隔てる東西塀SA6624に接続し、その交点から東4間目のところで、更に、北に塀SA6625が12間のびて西に折れ、後殿の北を限る塀SA6626になる。SA6626の西延長上においても、昭和33年調査のときに柱列を検出しており、これを一連のものとみなせば26間以上の塀となる。これら4条の塀はいずれも3m(10尺)等間である。

発掘地東北隅に南北5間以上(10尺間)の柱列SX6629を検出した。SA6625とのあいだが6m(30尺)で、柱筋を合わせていることから、南に延長してSA6624につながり、又、北延長上では第7次調査のSA304に連なる位置にあるが、建物の西側柱か、塀になるかは不明である。

溝遺構は前記雨落溝のほか、正殿東側の前から1間目の柱から東に玉石溝SD6607が走り、正殿・脇殿雨落溝と交叉している。発掘区の北方には、塀に沿い鉤形に折れて東に流れる素掘りの溝SD6633がある。

この時期の建物平面の特徴は広廂とすること、脇殿、後殿で2.7m(9尺)の柱間をとることなど、前期とは著しい相異をみせている。

D 期

SB6642・6614をC期の正殿・脇殿とほぼ同位置に配し、建物の規模を更に縮小している。

SB6642は身舎7×2間(桁行10尺間、梁行19尺)の北に廂・孫廂(7尺間)つきの東西棟である。身舎と廂は礎石、孫廂は掘立てである。身舎南面の柱列の礎石抜取り痕跡が僅かに残る程度で、しかも遺構面全体が南に傾斜していることなどから、身舎南面廂は削平された可能性が強い。

SB6614は身舎3×2間に南面廂つきの東西棟で、中心をC期脇殿の南北方向の心にあわせている。柱間寸法は桁行中央間を3m、脇間を3.6m、側面3間を2.7m等間とする。北面の東西両脇間にはそれぞれ3.9m、4.2mの出をもった廂がとりつくが、この2つの廂は時期が前後するかも知れない。

この時期の建物は以上の2棟だけであるが、配置の方法が前期の引き継ぎであるので、壇もそのまま利用された可能性がある。

遺物は瓦・土器・釘などである。

瓦はB期東第3殿の柱抜取穴から集中して出土した。軒平瓦6732・6664・6721型式が各々38・32・22%，軒丸瓦では6282型式が45%で最も多い。なかでも、通称東大寺式の6732型式はB期に限られ、同期の年代推定資料となる。

土器は土師器が少量ではあるが、B期の台地拡張部分下層とB期東第3殿柱抜取穴、C期の溝SD6633などから出土した。土器形式からみると、B期は天平末年まで遡らず、下限を奈良末期頃におさえることができる。また、C期の下限は平安時代に降るであろう。

今回の調査によって、第1次内裏推定地北域が第2次内裏後宮と酷似した機能をもち、しかも奈良時代、平城上皇の時代を通して存続していたことが明らかとなった。

いま、第2次内裏後宮遺構（ABCの3期に分かれる）と今回調査の遺構について、B・Cの2期を比較すると、B期は双方とも10尺方眼の地割を行なっていること、C期では柱間寸法に広狭両用し、方位がB期より不揃いになることなど、技術的な面で似た性格を両期とも共有している。またB・C期はともに大造営期で、B期の後半には一部改造するなど、両者の状況は類似しており、同時性を推定できる。このような点を考えあわせるとき、第1・2次内裏地域のB期、C期は共に同年代と云えないまでも、それぞれに近い時期の造営になるものと考えることができる。